

あらゆるインフラに求められる北海道コンセプト

聞き手・滝川 康治



みやわき。あつし 1950年生まれ。日本大学法学部卒業。経済企画庁物価局、参議院予算委員会調査室などを経て、日本公合研究所調査部主任研究員を務める。96年、北海道大学法学部教授に就任。主な著書として『財政投融资の改革』(東洋経済新報社)、「図解 財政のしくみ」(同)など

中身を十分吟味しないまま、景気対策として建設国債の大量発行で公共事業の大盤振る舞い——財政赤字が膨らむなかで、旧態依然のやり方は破綻寸前のところにきていた。そんな時代にあって、「財政危機」の本質や将来の北海道の公共事業のあり方をどう考えればいいのか。財政の仕組みに詳しく、行政に対しても積極的に提言している宮脇淳氏(北海道大学法学部教授)に聞いた。

資金繰りつかずシステム崩壊へ

——日本の財政赤字はついに六百兆円を突破し、二〇〇〇年度末の国債発行残高は三百六十四兆円にも達する見通しになりました。

まさに「借金大国」であり、財政は破綻寸前です。宮脇さんはこれまで、「財政危機の本質は、現在の財政制度を通じて、国民の貴重な貯蓄が効率的に使われ不良資産化することにある」と指摘されてきました。そこで、北海道に住む人間として、二一世紀の財政をどう考へればいいのでしょうか。

宮脇淳 この話は公共事業の問題にも絡んできます。財政危機というと「借金が増える」のを前

赤字が増える」「地方債、国債が積み上がりが利払いが大変だ」といったところが、いままでの議論でした。ところが、いま足元で起こつていて「これから深刻化する危機とは何なのか?」となると、二点あります。

一つは、いわゆる資金繰りがつかない、と云うことです。予算というものは、行政と議会が勝手に決めたのですが、それに見合った金が勝手に決めるかどうか分からない状況になってきた。支払いができるかどうか分からぬといつた事が、いま市町村で起こっています。

もう一つは、それと裏腹な問題ですが、その後の財政システムそのものが維持できない状況になってきました。北海道にとってみると、本州から自動的に所得が移転していくのを前

提に物事を考えるのは限界にきている、ということを意味すると思います。

「二一世紀の財政をどう考えるか?」でいえば、これから十年くらいはものすごく大きな三つの波がくるんですね。一つは借金の借り換えです。二つ目は職員の大量な退職です。それから、今まで公共事業で造られたインフラの更新投資ですね。これだけ厳しくなってきている局面で、そうした財政需要が発生していくわけですから、二一世紀の財政は今までの延長線では考えられません。

北海道に合った社会インフラを

——著書のなかで公共事業予算をめぐる五つの問題点(別項参照)を挙げておられます

が、北海道の実態に即して言うとどうなりますか。

宮脇 一つは「北海道にとって公共投資とは何だったのか?」という話だと思います。

確かに、農業と並んで(公共事業が)基幹産業であったことは間違いない。北海道の食べるための所得を維持してくれた。しかし、「これがだけの公共事業をやつしたことによって、北海道経済の体力が強くなってきたのか?」となると、そではありません。

ちょっと言葉は悪いんですが、北海道といふのは公共事業の消化をする場所になつた、と思う。ですから、公共事業費が徐々に減つてくると、今まで建設工事事業者自身がフロー(一定期間中に生まれた財の総称)の所得を得ることでとどまっていたために、

★公共事業予算をめぐる五つの基本的問題点と提言

① どのような社会資本をつくるべきなのか。

【提言】——新たな施設を造ることに力点をおくいた公共事業から、人づくりや技術開発、環境保全にも目を向けた、厚みのある総合的な社会資本づくりが求められる。

② その実現に向けた財源をどう確保するのか。

——予算を事業ごとの「プロジェクト予算」とし、投資額とその成果をできるだけ明確にする。

③ 完成した施設を活用するため、将来の維持・補修費・運営費といったランニングコストの負担をどうするのか。

——新規投資だけを重視した公共事業予算の見直し。将来のランニングコストも勘案したうえで、公共工事の優先順位を決定していく。

④ 公共事業が所得の再分配的功能を高めていくことをどう考えるか。

⑤ 主要財源の建設国債が抱える問題の再検討。



沙流川で建設工事中のニフキダム(92年)。当初は苫東開発に伴う水需要に対応するとの計画だった

——著書のなかで公共事業予算をめぐる五つの問題点(別項参照)を挙げておられます

が、北海道の実態に即して言うとどうなりますか。

宮脇 一つは「北海道にとって公共投資とは何だったのか?」という話だと思います。

確かに、農業と並んで(公共事業が)基幹産業であったことは間違いない。北海道の食べるための所得を維持してくれた。しかし、「これがだけの公共事業をやつしたことによって、北海道経済の体力が強くなってきたのか?」となると、そではありません。

ちょっと言葉は悪いんですが、北海道といふのは公共事業の消化をする場所になつた、と思う。ですから、公共事業費が徐々に減つてくると、今まで建設工事事業者自身がフロー(一定期間中に生まれた財の総称)の所得を得ることでとどまっていたために、

い社会資本づくりに努力する。社会資本の耐用年数に合わせた期間の建設国債を発行する。

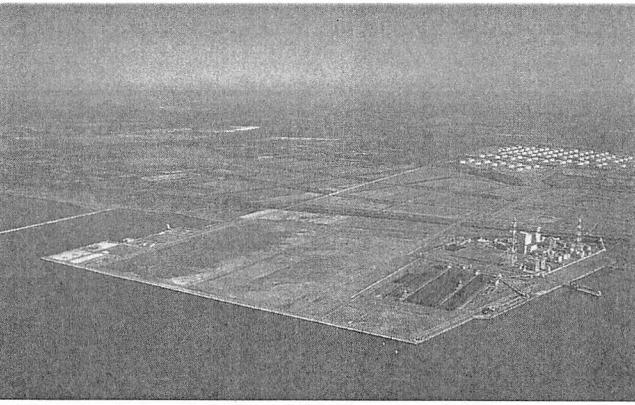
(宮脇氏著)『図解 財政のしくみ』の一部を要約

非常に体力が弱くなっちゃうわけです。

本当に北海道経済にとって建設工事が主軸になるためには、やはり設計から建設・管理に至るまで自立してできるような企業体にならないといけない。もうフローの所得だけを得て食べていける時代ではない、というのが、ありますと思います。

「それでは、北海道の社会資本として造られたものはどうなったか?」というと、結局、国は造るまでなんですね。国の規格で造ります」とあります。

「それで、北海道の社会資本として造られたものはどうなったか?」というと、結局、国は造るまでなんですね。国の規格で造ります」とあります。



国家主導の巨大プロジェクトが破綻し、今後を模索する苦東工業基地

発想でやつていけばいいのではないか」と具

体的に提言してください。

富蘭 一つは、公共事業の場合に「ハード

もの」という概念は少し見直しましょう、と

いうことです。例えば、農産物でも非常に有

くなってしまっているわけですね。早くそれ

脱しないといけない、と思います。

「それでは財源面をどうしたらいいんだ?」

というと、北海道開発庁を含めてこれからは非常に厳しい状況になってしまいます。地方分権ということで財源を地域に委譲する。これは取りくまなければいけないことです。

もう一つは、民間資金を使ってインフラ整備ができるのか、という発想を持つことであります。いまでは、公共事業は造る人は造るまでも、管理する人は管理するまででした。そうではなくて、ライフサイクルというプロジェクトのなかで社会インフラ整備をする形をとつて、いふ発想を持つべきです。そうすれば民間資金なんかも活用できるし、北海道は土地の値段も安いですから、工夫次第でかなり有望な形になっていく、と思いますね。

「それでは財源面をどうしたらいいんだ?」

というと、北海道開発庁を含めてこれからは非常に厳しい状況になってしまいます。地方分

権ということで財源を地域に委譲する。これは取りくまなければいけないことです。

もう一つは、よく言われる情報産業です。

ところが情報産業は、單に光ファイバーやパソコンをつけるのであれば、物を消費するど

うことで、今までの公共事業と同じなんですね。結局「情報産業の上に何を乗っけるか?」という問題が必要である。すると、北海道にしかないものを乗っけるしかないわけですね。

そこで戦略だと思うのですが、アメリカのシリコンバレーでも情報を全部外に出していくわけではありません。逆に、北海道にある情報のなかで閉じ込みをするような形になければいけない。北海道に来ればその情報に接することができる——そういうソフトづくりに取りくむだけでもかなり違ってくる。人を呼び込む、という話ですね。

三番目としては、介護・福祉というのがある。北海道というのは、ある意味で高齢化の先進地です。メリットですよね。先進地というのは、高齢化に対して、北欧でやられて

るよう時に計画の中に心電図と血圧を計る器械を入れて、それを情報インフラとセットにし

て、社会的な実験を進める町を創る——とい

うためのインフラ整備をする。そうしたことでも差別化はものすごく出ると思います。

全部国の規格で同じようなものを造ってい

けば、どんどん北海道の貴重な資源をなくし

ていくわけですよ。今まで申し上げた点の位置づけのなかで市場に売り込んでいく。マ

ークティングですね。そうした人材なり、仕組みを生み出す——これも公共事業の一つと

して捉えないといけない、と思います。そんなソフト系のものに取りくんでいく。

もう一つは、よく言われる情報産業です。

ところが情報産業は、單に光ファイバーやパソコンをつけるのであれば、物を消費するど

うことで、今までの公共事業と同じなんですね。結局「情報産業の上に何を乗っけるか?」という問題が必要である。すると、北海道にしかないものを乗っけるしかないわけですね。

そこで戦略だと思うのですが、アメリカのシリコンバレーでも情報を全部外に出していくわけではありません。逆に、北海道にある情報のなかで閉じ込みをするような形になければいけない。北海道に来ればその情報に接することができる——そういうソフトづくりに取りくむだけでもかなり違ってくる。人を呼び込む、という話ですね。

三番目としては、介護・福祉というのがある。北海道というのは、ある意味で高齢化の先進地です。メリットですよね。先進地とい

うのは、高齢化に対して、北欧でやられて

投資と成果明確に

——道が導入した「時のアセスメント」や

事業評価システムもその一つと思いますが、

投資額とその成果を明確にするための手法に

ついて提言してください。

富蘭 「時のアセス」や政策評価のシステ

ムで重要なことは、財政情報の質を良くする

ことです。今までのインフラ整備は、掛か

るコストの一部分しか道民に見せなかつたの

で、安易な形で利益誇張やすかつた。しか

し、実は蓋を開けてみると非常に大きなコス

トが掛かっている。そうであれば最初から、

造って運営することにどれだけのコストが掛

かるのか明らかにしましょう、と。そうする

ことで、道民のほうも本当に必要なものかど

うか議論できる、と思ふんですね。

よほそいう話をすると、民度の問題を言

われます。しかし、民度を議論する前に、必

要があるのではないか。

思が強かった。今回新しい仕組みになりま

るよう時に計画の中に心電図と血圧を計る器械を入れて、それを情報インフラとセットにし

て、社会的な実験を進める町を創る——とい

うためのインフラ整備をする。そうしたことでも差別化はものすごく出ると思います。

全部国の規格で同じようなものを造ってい

けば、どんどん北海道の貴重な資源をなくし

ていくわけですよ。今まで申し上げた点の位置づけのなかで市場に売り込んでいく。マ

ークティングですね。そうした人材なり、仕組みを生み出す——これも公共事業の一つと

して捉えないといけない、と思います。そんな

ソフト系のものに取りくんでいく。

もう一つは、よく言われる情報産業です。

ところが情報産業は、單に光ファイバーやパソコンをつけるのであれば、物を消費するど

うことで、今までの公共事業と同じなんですね。結局「情報産業の上に何を乗っけるか?」という問題が必要である。すると、北海道にしかないものを乗っけるしかないわけですね。

そこで戦略だと思うのですが、アメリカのシリコンバレーでも情報を全部外に出していくわけではありません。逆に、北海道にある情報のなかで閉じ込みをするような形になればいけない。北海道に来ればその情報に接することができる——そういうソフトづくりに取りくむだけでもかなり違ってくる。人を呼び込む、という話ですね。

三番目としては、介護・福祉というのがある。北海道というのは、ある意味で高齢化の先進地です。メリットですよね。先進地とい

うのは、高齢化に対して、北欧でやられて

るよう時に計画の中に心電図と血圧を計る器械を入れて、それを情報インフラとセットにし

て、社会的な実験を進める町を創る——とい

うためのインフラ整備をする。そうしたことでも差別化はものすごく出ると思います。

全部国の規格で同じようなものを造ってい

けば、どんどん北海道の貴重な資源をなくし

ていくわけですよ。今まで申し上げた点の位置づけのなかで市場に売り込んでいく。マ

ークティングですね。そうした人材なり、仕組みを生み出す——これも公共事業の一つと

して捉えないといけない、と思います。そんな

ソフト系のものに取りくんでいく。

もう一つは、よく言われる情報産業です。

ところが情報産業は、單に光ファイバーやパソコンをつけるのであれば、物を消費するど

うことで、今までの公共事業と同じなんですね。結局「情報産業の上に何を乗っけるか?」という問題が必要である。すると、北海道にしかないものを乗っけるしかないわけですね。

「北海道は特別」の意識捨てよう

——明治期の開拓使に始まる北海道の開発の歴史は、器は変わったものの、その基本的

ある意味で北海道にとっても重要なのは、いままで見えなかつたそのをやらないと北海道の危機はなかなか乗り越えられない。

しかし、それが統けられないということを認識するためには、いままで見えなかつたものを見せていく。そのためのツールとして評価システムは非常に重要なとと思います。

いままでの公共事業のやり方というのは、よく「費用対効果」の話で、「効果をきちんと測定しましょう」と言われる。誰にとってもそ

うですが、サクセス・ストーリーは忘がれた

ことを見せていく。そのためのツールとして評価システムは非常に重要なとと思います。

よく「費用対効果」の話で、「効果をきちんと測定しましょう」と言われる。それは重要

なことなんですが、効果というのはどんなに精緻にやつても相対的だと思つんでよ。で

き、それが統けられないということを認識するためには、いままで見えなかつたものを見せていく。そのためのツールとして評価システムは非常に重要なとと思います。

北海道は、いままで見えなかつたそのをやらないと北海道の危機はなかなか乗り越えられない。

しかし、それが統けられないということを

認識するためには、いままで見えなかつたものを見せていく。そのためのツールとして評価システムは非常に重要なとと思います。

よく「費用対効果」の話で、「効果をきちんと測定しましょう」と言われる。それは重要

なことなんですが、効果というのはどんなに精緻にやつても相対的だと思つんでよ。で

き、それが統けられないということを認識するためには、いままで見えなかつたものを見せていく。そのためのツールとして評価システムは非常に重要なと思います。

よく「費用対効果」の話で、「効果をきちんと測定しましょう」とと言われる。それは重要

なことなんですが、効果というのはどんなに精緻にやつても相対的だと思つんでよ。で

き、それが統けられないということを

認識するためには、いままで見えなかつたものを見せていく。そのためのツールとして評価システムは非常に重要なと思います。

よく「費用対効果」の話で、「効果をきちんと測定ましょう」とと言われる。それは重要

なことなんですが、効果というのはどんなに精緻にやつても相対的だと思つんでよ。で

き、それが統けられないということを

認識するためには、いままで見えなかつたものを見せていく。そのためのツールとして評価システムは非常に重要なと십시오.

よく

既存システムは破局寸前 視野を広げて構造改革へ

「財政危機下での公共投資のあり方」の後編は、長年の論争にピリオドを打って事業中止が決まった千歳川放水路計画をはじめ、談合と天下りの構造、道庁や開発局の政策・事業評価の現状など具体的なテーマに沿って、宮脇淳氏に問題点と課題を語ってもらった。それらを踏まえて、これまで北海道を支えてきた財政や政治・経済の構造が崩壊するなかでの進路を展望する。



みやわき・あつし 1956年生。日本大学法学部卒業。経済企画庁物価局・参議院予算委員会調査室などを経て、日本総合研究所調査部主任研究員を務める。96年、北海道大学法学部教授に就任。主な著書として「財政貿易融資の改革」(東洋経済新報社)、「国解 財政のしくみ」(共著)など。

宮脇淳氏インタビ

転換期の公共事業

千歳川放水路は

法学
委員会調
任研究
前就任
新經濟

——千歳川放水路計画が中止に至る十七年間の歴史は、北海道の公共事業に多くの教訓を残しました。なかでも、足踏み状態の末に地道が設置した十歳川流域の治水対策のための検討委員会とその拡大会議は、「関係者が一堂して議論する」という貴重な実践の場になつた、と思います。それらの経験を踏まえ、今後の河川公共事業をどうしたらいいのか。また、道民はどう考へればいいか。わたしは、「川の生態系を復元するための公共事業」をと言つてゐるんですが、宮脇さんの考へをお聞きしたい。

てこなかつた。やはり北海道の場合は、そうした議論がすぐ必要です。

——住民も「行政にお任せ」で川に行かなくなり、河川事業に対する関心も薄かつた。
宮脇 そうでしょうね。選択肢を決めてから事業を始めちゃうんですよ。選択肢として何があるのかを道民が議論できる。その一歩だった、という気がしますね。今後は、そつした議論を深めていけばいいわけですね。

——次に、公共事業に伴う談合や天下りの

宮脇 慶善し悪しはちょっと置いて、こうし構造について、北海道の特殊性があると思います。この構造をなくすのは容易でないのでですが、財政上からも、いつまでも続けられません。北海道出身ではない宮脇さんには、逆に良く見える部分があると思いますので、そのあたりについてお話し下さい。

ましたか、やはり必要なのはビジョンです。
「その公共事業をやつて、どういう地域を開拓するのか」と自分たちで考えない限りは、単なる消費場所として、中央の規格で事業がどんどん行なわれてしまう。極論すると、そうなれば道民の意見は聴く必要がない。
千歳川放水路のことを外から見ていて、議論する体質になつたのはすごく良いことだと思います。苦小牧東部開発の話でも、「本当の意味で議論だったか?」というと、議論じやしないんですね(笑)。しかし、千歳川はそこを半歩でも踏み込んだ。「事業をやる」という

た議会構造とかは、今までの北海道における公共事業のサクセス・ストリーのなかでのやり方なんですね。なかなかが断ち切れない構造は確かにあります。しかし、それを支えてきた財政や経済の仕組みは大きな転換期にきているわけです。そういう状況のなかで先が見えている、と考えていかなければ、逆に後での反動が大きい。

北海道で特に強いのは、形から入ってしまう。例えば、一般競争入札という形を採れば、こういう問題はなくなるのか、といえば、なべならないことは実証済みです。北海道にと

つては、雇用の問題でも、建設土木業が基幹産業であることは間違いない。しかし、このやり方をしていくと、将来そこがもたない。それが本当の意味での産業政策や地域政策になつているのか、ということなんですね。

これは道府だけの問題でない。行政は調整

機関ですから、民間が変わつてもわないと困る。こういう良い機会であり、今すぐ開発庁の予算がゼロにならないわけですから、激変緩和措置が動いている間に新しい構造にしていかないといけない。

道は政策評価で情報の質向上へ

——道の「時のアセスメント」では、わたしも土崎高原道路や松倉ダムなどの現場に行き、いろんな人から取材してきました。この試みは画期的だった半面、どうでもよいような事業やマスコミの話題になつている事業を取り上げた傾向が強かつた。そのあたり、どう受け止められますか。

道は政策評価で 情報の質向上へ

バクトのあるものをダルビングしたのは事実ですかね。ただ、やめる仕組みを実際に動かしたのは大きいですよ。

もう一つ重要なことは、政策評価システムでものが決定されるわけじゃない。最終的に決定するのは道民なわけです。「政策評価システムとは何なんだ?」となれば、大きな柱の一つが事業の実態を道民に伝える、ということだと思います。正直言つて「政策評価書」を見ても役所的な答弁なんですね(笑)。おそらく、そのまま情報開示されても、道民が見られれば事業の実態は分からぬ。

に対して道序のやつている施策の実態をつなげていく。情報の質を高めていく面が非常に大きいんだろう、と思います。例えば、調書を見て議論しているなかでは「事業の必要性になると「地元の要請」とかが同じように並ぶ。そうした受け止め方がされている実態もどんどん出していいで、「本当にそうなのか?」という議論ができる。

——宮脇さんは、道の政策評価委員会の委員長をされていますが、ものすごい事業の数がありますよね。

宮脇はい。
——それを七人の委員でチェックしきれるのかな」という気がするんですけど、そのへんを七人の委員でチェックしきれることがありますよ。

宮脇はい。
——「時のアセスメント」をめぐって開かれた自然保護団体のシンポジウムも開かれました。



「時のアセスメント」をめぐって開かれた自然保護団体のシンポジウムも開かれました

はどうでしたか。

宮脇 そのとおりで、事業をすべてチェックすることはできません。「どれだけできるのか?」と言つたら、ほんとの一握りです。「じ

宮脇 政策至など実際に政策調整をやっている部署は、それなりに意識を持つてやっているのは当然なんですが、まだ庁内には、「政

策評価何のためにやるのか?」という疑問は当然あると思いますね。しかも、負担はや、その現美のなかで何をするんだ」となれば、第三者で構成する評価委員会を通じて、道序から提供される情報の質を良くすることだと思います。政策評価というのは、道序の自己評価ですね。自己評価はそれでいいと思うんですが、それを道民に伝えて、道民のいろいろな批判を受けるプロセスにおいて、質の良い情報を提供するんだ、と。将来的には道議会に対し情報を持ち込むと提示していけば今までの利益誘導との緊張関係が生まれてくるはずですね。

この評価委員会は、あくまでも仲介の役割であって、何を決めるわけではなくて、情報の流通業的な役割が限界だと思います。

——道議会との緊張関係は、士幌高原道路の「時のアセスメント」のときに若手ありました、そのへんはこれからだと。

宮脇 まだまだ緊張関係が出てくるようないい情報が質になつてない。道議会のほうも個別事業で「これが」と言って議論するわけでもなく、自分たちの個別の利害に関係ないわけですね。今のところは意識した存在になりえないんじゃないですか。

——これからは、そういう存在になつてもらわなければなりません。

宮脇 そのとおりだと思います。

——今は政策評価課が中心になつてやつてあります、道職員の姿勢をどうお感じですか。

宮脇 いよいよく面があるかもしませんが。

——ただ、開発局の有識者委員会は非公開なんですよ。

宮脇 そういうところが問題だと思ったんであります。苦東の懇談会でも「何で(記者らを)入れてやらないんだ」と言つたんですけどね。それは外部から言うと、きちんと説明しきれないからじゃないか、と。おそらく、研究会などをオーブン化すれば、受けのほうもそれなりに觉悟がりますよね(笑い)。

——オーブンで話したくないことは、事前に役所の人と打ち合わせるとかしますよね。必ずそういうことになる。

宮脇 なるわけですね。

——道の意見を反映するということでは、すべてが悪いわけではなく、「良い」として説明される、ということです。その覚悟があるが、ないか、という問題が非常に大きいと思います。

宮脇 各種の委員会が行なわれていますが、役所のメガネに適う人しか入れないのは仕方がないんですね。

宮脇 そういう体質があるのは否定できません。この問題というのは、隠れ蓑になっています。

——各種の委員会が行なわれていますが、役所のメガネに適う人しか入れないのは仕方がないんですね。この問題というのは、隠れ蓑になっています。

——道の意見を反映するということでは、すべてが悪いわけではなく、「良い」として説明される、ということです。その覚悟があるが、ないか、という問題が非常に大きいと思います。

にあるんだ」と原点に戻つて考えなければなりませんし、本当に行政がどこまでやらなければいけないのか。行政サービスといつても民間サイトでできるものがあるんじゃないかな、と。原点に戻つて議論しないと、関与団体の問題は単なる一組織批判みたいなことで終わってしまうんですね。

——道の意見を反映するということでは、すべてが悪いわけではなく、「良い」として説明される、ということです。その覚悟があるが、ないか、という問題が非常に大きいと思います。

——道は試行錯誤しながらやつていると想いますが、公共事業のハート面では開発局がやる規模の大きさはすごいわけです。開発局は、中央省庁のシステムのなかで事業再評価を始めましたが、「時のアセス」や政策評価に比べると中身が粗い。有識者の委員会にしても、数回しか会合を持たない。情報の提示方法にしても、委員会が終わつた後で報道発表する程度にとどまっています。道民の意見が反映できるシステムはほとんどなく、開発局と委員の先生方がやつているのが実態です。

——道は試行錯誤ながらやつていると想いますが、公共事業のハート面では開発局がやる規模の大きさはすごいわけです。開発局は、中央省庁のシステムのなかで事業再評価を始めましたが、「時のアセス」や政策評価に比べると中身が粗い。有識者の委員会にしても、数回しか会合を持たない。情報の提示方法にしても、委員会が終わつた後で報道発表する程度にとどまっています。道民の意見が反映できるシステムはほとんどなく、開発局と委員の先生方がやつているのが実態です。

——道は試行錯誤ながらやつていると想いますが、公共事業のハート面では開発局がやる規模の大きさはすごいわけです。開発局は、中央省庁のシステムのなかで事業再評価を始めましたが、「時のアセス」や政策評価に比べると中身が粗い。有識者の委員会にしても、数回しか会合を持たない。情報の提示方法にしても、委員会が終わつた後で報道発表する程度にとどまっています。道民の意見が反映できるシステムはほとんどなく、開発局と委員の先生方がやつているのが実態です。

——道は試行錯誤ながらやつていると想いますが、公共事業のハート面では開発局がやる規模の大きさはすごいわけです。開発局は、中央省庁のシステムのなかで事業再評価を始めましたが、「時のアセス」や政策評価に比べると中身が粗い。有識者の委員会にしても、数回しか会合を持たない。情報の提示方法にしても、委員会が終わつた後で報道発表する程度にとどまっています。道民の意見が反映できるシステムはほとんどなく、開発局と委員の先生方がやつているのが実態です。

傷つく財政制度見すえ創意工夫

——技術者集団の開発局がどう変わり、どんな公共事業をやつしていくと良いのか。わたしは「復元のための公共事業が一つだろう」と言つてゐるんです。優秀な人たちが集まつているのは事実ですから、「住民のために働いているんだ」という意識を持つて仕事を一つひとつ点検していく、少しずつ変わってくると思います。

——道の意見を反映するということでは、すべてが悪いわけではなく、「良い」として説明される、ということです。その覚悟があるが、ないか、という問題が非常に大きいと思いません。

——道の意見を反映するということでは、すべてが悪いわけではなく、「良い」として説明される、ということです。その覚悟があるが、ないか、という問題が非常に大きいと思いません。

——道の意見を反映するということでは、すべてが悪いわけではなく、「良い」として説明される、ということです。その覚悟があるが、ないか、という問題が非常に大きいと思いません。

——道の意見を反映するということでは、すべてが悪いわけではなく、「良い」として説明される、ということです。その覚悟があるが、ないか、という問題が非常に大きいと思いません。

——道の意見を反映するということでは、すべてが悪いわけではなく、「良い」として説明される、ということです。その覚悟があるが、ないか、という問題が非常に大きいと思いません。

——道の意見を反映するということでは、すべてが悪いわけではなく、「良い」として説明される、ということです。その覚悟があるが、ないか、という問題が非常に大きいと思いません。

——技術者集団の開発局がどう変わり、どんな公共事業をやつしていくと良いのか。わたしは「復元のための公共事業が一つだろう」と言つてゐるんです。優秀な人たちが集まつているのは事実ですから、「住民のために働いているんだ」という意識を持つて仕事を一つひとつ点検していく、少しずつ変わってくると思います。

——道の意見を反映するということでは、すべてが悪いわけではなく、「良い」として説明される、ということです。その覚悟があるが、ないか、という問題が非常に大きいと思いません。

——道の意見を反映するということでは、すべてが悪いわけではなく、「良い」として説明される、ということです。その覚悟があるが、ないか、という問題が非常に大きいと思いません。

——道の意見を反映するということでは、すべてが悪いわけではなく、「良い」として説明される、ということです。その覚悟があるが、ないか、という問題が非常に大きいと思いません。

——道の意見を反映するということでは、すべてが悪いわけではなく、「良い」として説明される、ということです。その覚悟があるが、ないか、という問題が非常に大きいと思いません。

——道の意見を反映するということでは、すべてが悪いわけではなく、「良い」として説明される、ということです。その覚悟があるが、ないか、という問題が非常に大きいと思いません。

——道の意見を反映するということでは、すべてが悪いわけではなく、「良い」として説明される、ということです。その覚悟があるが、ないか、という問題が非常に大きいと思いません。

政策ではなくて、「千歳川を挟んで人や物を移動させる仕組みを創つてください」と政策を提示すれば、必ずしも橋でなくていいはずなんです。そういうところから提示して、自由度を与えてあげれば、非常に技術力は高いですからもっていろんな工夫をしてもらえると思うんですね。

河川事業の場合だと、建設省の考え方

がかなり変わってきて、逆に北海道の現場の人方が追いつけない実態もあります。そうなると、両方が変わらなければならない。

宮脇

そうですよね。河川はガラガラ変わりました。確かに中央で変わつてもコンセプトが伝わってこないと、一世代前の工事がやられることになるんですよ。開発局も北海道の建設主本業界と同じような構造なわけですから、自由度を上げて、自分たちで考えてもらわなければなりませんね。

一道は、自分の事業の見直しはやれても、



硬直化した公共事業のやり方に対して、開発局みずから変わることが求められている(写真は同局が入っている第一合同庁舎)

「補助金をもらつて過大な事業をやるよりは、身の丈に合った事業をやつたほうがいいんだ」という判断が可能な仕組みでされれば別だと思います。

建設の場合であれば、補助金は造るまです。政策評価なんかを通じて、

「補助金をもらつて過大な事業をやるよりは、身の丈に合った事業をやつたほうがいいんだ」という判断が

可能なかぎりで

思ふんですね。

しかし、それでは、その仕組みがど

補助事業はなかなかできない。農政部の職員に話を聞くと、「付けなくてもいい予算なのに、…」と内心は思ついても、やれないようですね。

宮脇 この問題は、北海道だけがどうこうしてもできない。書生っぽい言い方ですが、地方分権で道州制なんかをきちっと考えないと、こういう無駄はなかなか直せない。ただ、補助金などに限界があるのは間違いないわけですから、その先を描かないといけない。

宮脇 特に農業の分野だと、例えば補助率九五%の事業があつて、農家はものを考へないし、黙りにしてしまつてある。ある種の事業は逆に補助率を上げたほうが、農家は「こんなものいらぬ」と言って参加しない。そうしたほうがいい、と思うことがありますね。

宮脇 补助をもらつている側からのインセンティブはなかなか起りづらい。これは金目のほうがきつくなる以外ない、と思いますね。例えば施設建設の場合、例えは施設建設者とかは、相対的に危機感の強い人が多いですね。今後、二三十年、三十年と事業をやっていかなければならぬわけで、長期的視野でものを見ている方はそれなりにいます。ここ二三年食つていけるというのではなくて、長期的にものを見ていかなければいけない。そこに危機感が少し出てくるんだろう。北海道はこれまで、自らが「将来どうするか」を考えたことがなかつたんです。毎年予算をもらつてきたわけで、その分、危機感が弱い。もう一度、拓銀が破綻したときのことを考えいく必要があるような気がします。

宮脇 一年配の人は駄目ですか。

宮脇 どうしても見る期間が短くなつてしまつますからね(笑)。これも書生っぽいですけど、危機感は少ないなかで、「今まで北海道を支えてくれたシステムがどうなつているのか」をもつと知らないといけない。内地から所得再配分を受けているし、「もらえるうちはもらっておけ」という考え方できま

——こうした構造を支えているのは道民であつて、いくら「役所はけしからん」と言つても、一人ひとりが変わらなければ話になりません。でも、北海道の人たちは能天氣で、口岸では厳しい「財政危機になる」「開発庁がなくなると大変だ」とか言ふんです。それが止まつていて感じを受けます。

宮脇 特に、この一年間は危機感が弱りましたよね。——政府も公共事業の大盤振る舞いをまだやつていますからね。

宮脇 ただ、三十代あたりの中堅の企業経営者たちは、相対的に危機感の強い人が多いですね。今後、二三十年、三十年と事業をやっていかなければならぬわけで、長期的視野でものを見ている方はそれなりにいます。こ

ういう内側の視点ではなく、外側を見つめて、「どこまで自分たちの親戚が傷ついているのか」と早く察しないといけない。

——最初に言われたように、ソフト的な面で北海道の強みはあるわけです。なくなったとはいえ、自然環境もまだ残つてゐる。それは北海道の強みとしてアピールして、「あなたの方にも恩恵が及ぶんだから」と主張して取つてくる姿勢が必要ですよ。

宮脇 そのとおりです。もううものはもちろんおいていいんですが、それに対しても自分たちできらんと主張し、説明をつける。その覚悟があればどんどんもらつていのかもしません(笑)。北海道の人は、ある意味で本当にいい人が多い。ただし、いい意味での駆け引きができない。そろそろ、そろじた駆け引きをしなければいけない時代ですよ。

——道民の一人ひとりが切磋琢磨し、主張していくことに尽きますね。本日は、ありがとうございました。

れだけ傷ついているのか。例えば交付税制度でも三千兆円程度の累積赤字で、支えているのは郵貯のお金なんですね。その郵貯の制度は二〇〇一年から大改革になる。そうすると交付税制度も先が見えてきている。過去の例を見れば、交付税制度の赤字は国と地方で折半で負担する。そういうことはないですか。十五兆円負担するとしたら一年分丸々なしです。よ。そのくらいの借金を抱えている。

それから、東京や大阪といった都市部がこれからどんどん疲弊化していく。そうすると、出し手がいなくなるということです。北海道

——そのくらいの借金を抱えている。それから、東京や大阪といった都市部がこれからどんどん疲弊化していく。そうすると、出